

形として残す

秋篠宮文仁

あきしののみや ふみひと / 1965年生まれ。(社)日本動物園水族館協会総裁、(財)山階鳥類研究所総裁ほか。専攻は生き物文化誌。理学博士。著書に『鶏と人—民族生物学の視点から』(小学館)『欧州家禽図鑑』共著(平凡社)などがある。

私たちの身近にいる「生き物」の研究について、よく聞く話がある。生物学を専攻し、そのために数多くの標本を大学に所持している研究者がいても、その人が退職すると標本は捨て去られてしまうという。まさか全ての大学で同様のことが現在も起こっているとは思えないが、少なくとも過去においては当然らずとも遠からずといったところだろうか。科学振興に力を入れている国とは思えないほど、生き物を「形」として残してこなかったといえよう。

ところで、私自身、欧州の自然史系博物館に通っていたことがあるが、その時に得た印象は、該当する標本をかなり高い確率で見つけることができたということである。これは、それぞれの国で学者や収集家が集めた品を、博物館や大学がリファレンスとして使えるように現在まで残しておいてくれたからに他ならない。そのことは、標本を資料として残すこと自体に大切な意味があることを教えてくれている。

これを私の関心事である家畜誌に当てはめてみよう。家畜誌の世界においてもゲノムなどの分子研究分野が流行っているが、被採取個体が残っていないければ再現性もないし追試もできない。逆に、生体・遺体に関わらず、属性がはっきりとした形で生き物自体が残っていれば、そこからの科学としての発展は大いに期待できるといえる。じつのところ、家畜誌、

なかでも家禽とその成立背景に興味を抱いている私にとつては、文化や地理的隔離による羽色や骨格などの姿形の異なりを調べたいのだが、参考になるほどの情報が日本にはきわめて少なく、困ることが多々ある。したがって、日本が家畜誌研究に資する資料を残しているかという点といわざるを得ない。

しかし幸いにも近年、我が国においても生き物自体を保存しているという傾向が徐々に増してきている。私の関係している動物園や水族館においても、動物が死亡したときに何らかの形で保存することが多くなってきた。ある博物館では小学生から大人までがサークルをつくり、動物園等で死亡した動物の骨格標本作製をしているとの話を聞いた。遺体科学の面白さと標本資料の重要性について書かれた書籍も立て続けに出版されている。

このような動きは、現在の日本では到底主流とはいえないが、まずは個人単位そして組織単位で行動を起こしていく必要がある。無意味な殺生をするべきでないことはもちろんだが、死亡してしまつた生き物を形として残すことは、さまざまな面から考えて、我が国の生物学ひいては博物館に必ずや資するものとなることだろう。最近よくいわれる「もつたいない」をさらにポジティブに、学術発展のために「形として残す」思想が普及することを願っている。

- 15 時論・新論・理想論
知られざる来館者の行動
佐々木 亨
- 16 外国人として生きる
インドネシアと日本をつなぐ人
浜元 聡子
- 18 地球を集める
アフリカン・ビーズの
展示に込められたもの
池谷 和信
- 20 生きもの博物誌
サルに小馬鹿にされる日本人
伊澤 紘生
- 22 フィールドで考える
都市の「地層」を読む
木村 周平
- 24 2006年度年末年始展示イベント
「いのしし」
次号予告・編集後記

イノシシと人間の共生

高橋 春成

おいらは猪八戒、
イノシシよりは偉いのだ
磯部 彰

未来へひらくミュージアム

- 08 参加体験型の感動を提案
—市民とともにある九州国立博物館—
葛信 祐爾

表紙モノ語り

- 11 マタンサ デ ポルコ
野林 厚志

みんなくインフォメーション

- 12 みんなくインフォメーション
- 14 万国津々浦々
「赤」と「緑」と「森の人びと」
名和 克郎

月刊



目次

JANUARY 2007
月刊みんなく

1

- 01 エッセイ 世界へ世界から
形として残す
秋篠宮文仁

02 特集 イノシシとブタ

人間くさい動物
—イノシシとブタ—
野林 厚志

イノシシがブタに変わるとき
—小さな骨からひもとく歴史の事実—
本郷 一美